

八尾歴史物語

四六巻

続・河内名所図会を訪ねて⑧（観光地になった高安千塚・中編）

江戸時代の高安千塚古墳群（以下「高安千塚」）は、河内国の名所の一つとして、多くの人々が訪れていたことが『河内名所図会』から分かりました。

その人気の秘密は何だったのでしょうか。前回書きましたように、石室内に納められた副葬品を目当てに訪れる人もたくさんいました。が、洞窟のような形状の横穴室石室が珍しかったというのも理由の一つです。妖怪の一種とされた恙虫つがひしや火の雨（火山の噴火）などの被害から身を守るための場所や昔の人々の住まい、またはお墓など、石室の用途としてさまざまな説が考えられていました。

明治時代になり、日本の近代化が進められていく中で、豊かな知識や技術を持ったいわゆるお雇い外国人が数多く日本に来ることになります。彼らも余暇を利用して高安千塚を訪ねました。彼らの手には江戸時代の観光ガイドブックであった『河内名所図会』がありました。現在

のインバウンドブームの先駆けともいえるでしょう。

彼らを代表する人物として、大森貝塚を発掘調査したモースがいました。彼は単なる物見遊山ではなく、日本の歴史を学ぼうとする姿勢で科学的に高安千塚の調査を行いました。そして、石室が古墳（お墓）であると考えたのです。

彼らの優れた功績は、日本考古学の発展に役立つものでしたが、残念ながら、明治時代の一般人の人々にはきちんと伝わっていませんでした。【続く】

☆問合せ 文化財課

☎ 924・8555

FAX 924・3995



▲高安千塚郡川北支群を描いた河内名所図会「法蔵寺の境内」